

氏名(本籍)	まつむらしげき (東京都)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博乙第2353号
学位授与年月日	平成20年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	呉昌碩研究

主査	筑波大学教授	博士(文学)	松本肇
副査	筑波大学教授	博士(文学)	新保邦寛
副査	筑波大学准教授		小松建男
副査	筑波大学講師	博士(文学)	稀代麻也子
副査	筑波大学准教授		菅野智明

## 論文の内容の要旨

本論文は、清末民国初の転換期に生きて、海上派と呼ばれる上海書画壇の領袖となった呉昌碩に関する研究で、「文人職業書画家」という視点から、呉昌碩の独特の位置と、その交流の実態について論じている。内容は、以下の通りである。

### 序

#### 第一編 呉昌碩の位置

第一章 呉昌碩の位置－文人職業書画家として／第二章 呉昌碩の潤格／第三章 呉昌碩の画譜／第四章 呉昌碩の石鼓文臨書／第五章 呉昌碩の石鼓文論

#### 第二編 呉昌碩と友人弟子

第一章 呉昌碩と王一亭／第二章 呉昌碩と趙子雲／第三章 呉昌碩と鄭孝胥／第四章 呉昌碩と周夢坡

#### 第三編 呉昌碩と日本人士

第一章 呉昌碩と日下部鳴鶴／第二章 呉昌碩と河井荃廬／第三章 呉昌碩と長尾雨山／第四章 呉昌碩と白石六三郎／第五章 呉昌碩と大谷是空／第六章 呉昌碩と田口米舫／第七章 呉昌碩と大倉喜七郎／第八章 呉昌碩と夏目漱石／第九章 呉昌碩と高島屋

### 結

序は、本論文の目的と構成について記している。

第一編は、文人であると同時に、職業書画家でもあるという二面性を有する呉昌碩の位置について分析している。第一章では、みずからの書画を売ることによって生計を立てていた上海時代の呉昌碩を中心に、彼の経済的行為について資料に基づいて検証した。第二章では、呉昌碩がみずからの書画を売るにあたって定めた揮毫料一覧について分析し、文人でありながら書画を売っている自虐の意識が窺えることを明らかにした。第三章では、呉昌碩の図録が多く出版されたことに着目し、これらの図録が学画の手本として用いられ

る画譜であったことを論証した。第四章では、呉昌碩の芸術行為の根幹とされた石鼓文臨書が、実は彼にとっては学問的行為であったとする新しい見解を提示した。第五章では、呉昌碩が石鼓文について論じた詩文を取り上げて、呉昌碩の石鼓文の臨書が、高度な学問的理解に基づいて行われていたことを明らかにした。

第二編は、呉昌碩と友人・弟子との交流を論じている。第一章では、呉昌碩の友人、パトロンであった王一亭が、中国を侵略している日本企業の買弁であった憂苦から逃れ、書画家として新しい人生を歩むために、呉昌碩の弟子となったことを論じた。第二章では、職業書画家出身の趙子雲が、文人出身の画家である呉昌碩に弟子入りしてその画風を習得したことにより、当時の上海の気風に沿った売画を行ったことについて論じた。第三章では、満州国総理にまでなる高級文人鄭孝胥と、呉昌碩との交流について、新たに世に出た『鄭孝胥日記』を資料にして分析した。第四章は、呉昌碩晩年の友人であり、パトロンであった周夢坡との交流について論じたもので、二人の間に遺民意識の共有があることを指摘した。

第三編は、呉昌碩と日本人との交流を論じている。第一章では、明治・大正期に日本書道界の指導者として活躍し、呉昌碩喧伝の端緒を開いた日下部鳴鶴との交流を取り上げ、二人の交誼の実態を追究した。第二章では、日本人唯一の弟子であった河井荃廬との関係について考察し、河井荃廬が、呉昌碩の弟子となった一方で、風格の異なる趙之謙の書画を収集していたことに対して、呉昌碩が寂しい気持ちを抱いていたことを指摘した。第三章では、近隣に住み、詩文の交わりを結んだ文人、長尾雨山との交流を取り上げ、呉昌碩が長尾雨山に与えた書画篆刻および書簡等の資料に基づいて、長尾雨山が高度な中国文人的教養をもって呉昌碩と交わったことを検証した。第四章では、晩年の呉昌碩と親しく交わり、上海で呉昌碩の個展をはじめて開いた料亭の主人、白石六三郎の事跡を、子孫の証言および提供資料によって明らかにした。第五章では、近代のジャーナリストである大谷是空との交流に注目し、呉昌碩と大谷是空はともに不平の気を共有していたことを指摘した。第六章は、大正年間に、呉昌碩の精品を取めた図録を刊行して日本に紹介した、田口米舫の事跡を明らかにしたもので、中国の正統的筆法を軽視する風潮が日本にあったことに対して、田口米舫が危機感を抱いていたことを指摘した。第七章では、大倉財閥二代目総帥の大倉喜七郎との交流を取り上げ、大倉喜七郎が呉昌碩に依頼した刻印が、代刻であったことに注目し、呉昌碩最晩年の代刻の実相を明らかにした。第八章は、呉昌碩が夏目漱石に与えた影響を論じたもので、岩波書店版『漱石全集』の装幀に見える石鼓文の意匠が、漱石のデザインした『こころ』の装幀をもとにしており、この『こころ』の装幀が、呉昌碩の臨書した石鼓文にヒントを得たものであったことを考証した。第九章では、日本における呉昌碩書画の受容に欠かせない役割を果たした高島屋を取り上げ、富岡鉄斎と並べることによって呉昌碩熱を現出させていった高島屋の販売戦略などを資料に基づいて検証した。

結は、呉昌碩に、文人でありながら、職業書画家でもあるという矛盾が一貫して存在し、この矛盾があるからこそ、呉昌碩の人と作品が魅力的なのだと述べて、全体のまとめとする。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

呉昌碩は、詩書画印にすぐれた、中国最後の文人として知られる。文人と呼ばれる人たちは、普通は自分の作品を自分で売ることにはしないものである。ところが、呉昌碩は、自分の作品に値段をつけて自分で売る職業書画家でもあった。つまり、書画を売ることを職業にせず、趣味として楽しむことを目的とする、旧来の文人の枠を逸脱した存在であった。このような、文人であると同時に職業書画家でもある呉昌碩を、「文人職業書画家」と名づけ、その矛盾する二面性に注目して、呉昌碩の葛藤と苦悩を明らかにしたところに、本論文に大きな特色がある。呉昌碩に関する研究はこれまでもあった。ただし、その大部分が、書画篆刻に関する作品論および顕彰的作家論である。このような研究の動向の中で、本論文は、呉昌碩を転換期において独創的な生き方をした人物としてとらえ、その複雑な胸中を追究するという新しい研究の方法を開拓し

た。

本論文で、著者は、これまでほとんど触れられることのなかった、呉昌碩の経済的行為の実態を明らかにした。例えば、書画の価格表は、適切な揮毫料を確保するとともに、作品を求める人を制限するために定められる、という指摘は、芸術活動を経済的観点から論じたものとして興味深い。呉昌碩が山水画の価格を高額にしたことを、著者は、山水画の依頼拒否の意思表示と見て、山水画に対する苦手意識を認めている。金額の表示を、心理的な側面と結びつけて解釈しているところが注目される。

呉昌碩と弟子との交流について論じたところでは、代作に対する新しい見方を提示している。呉昌碩が弟子に代作をさせたことについて、著者は、代作は弟子を養成するための実地訓練と見なす。このような見方は、代作に、単なる模倣ではない、積極的な意義を認めるものとして評価される。また、弟子との交流を論じるのに、文人派と工人派の対立、という視点を導入している。これは、文人と職業書画家との間で苦悩する呉昌碩の矛盾を、師弟関係の矛盾に拡大したもので、本論文の一貫性を証明している。

呉昌碩と日本人との交流についての論考は、日中文化交流研究という側面をもち、本論文の大きな成果のひとつである。著者がここで、呉昌碩喧伝の端緒を開いた書家、日本人で唯一の弟子、料亭の主人、ジャーナリスト、図録刊行者、財閥二代目、百貨店などを取り上げたことによって、呉昌碩の作品が日本で広く受容されるまでの経過が非常によく理解できる。また、白石六三郎、田口米舩など、日本でほとんど知られていない人物の事跡を明らかにしたことも、呉昌碩研究にとって大きな意義がある。

本論文は、多くの資料を収集して過渡期に生きた人物の事跡を丹念に追究しているけれども、資料紹介が中心となる傾向も若干見受けられる。また、夏目漱石の『こころ』の装幀についての考察では、夏目漱石研究の成果が十分に反映されていないのが惜しまれる。今後は、日本の近代文学を視野に入れた研究も必要になるだろう。

以上のような課題は残るけれども、本論文は、「文人職業書画家」という独特の視点に立ち、呉昌碩の芸術活動と経済行為の実態を明らかにし、また、その幅広い交流を追究したことによって、呉昌碩研究の発展に大きく寄与した。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。